

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18500611

研究課題名（和文） 室町時代物語にみる食文化の実際 現代の食習慣・食文化の淵源

研究課題名（英文） Food Culture of the Muromachi Period as Perceived

研究代表者

小林 美和（KOBAYASHI YOSHIKAZU）

帝塚山大学・現代生活学部・教授

研究者番号：70195824

研究成果の概要：近時、食育の問題が重要視され、あらためて日本の伝統的食文化見直しの必要性が認識されはじめている。本研究は、そうした社会的要請を背景として、日本食文化の淵源として位置づけられている室町時代の食文化を、当時盛んに作成された室町時代物語を主たる素材として追究した。室町時代物語の多くは、絵巻や奈良絵本等といった形態で流布しており、それらは視覚的資料としても、当時の食文化・生活文化の実態を知る上で、有益である。本研究では、「鼠の草子」、「猿の草紙」、「常盤の姥」等の作品を素材として、当時の食文化および生活文化の実態を究明した。

交付額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 500,000   | 0       | 500,000   |
| 2007年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2008年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 1,500,000 | 300,000 | 1,800,000 |

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・食生活学

キーワード：食文化

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 学問の対象として食文化の領域が認知されるようになったのは、1980年代以降とされ、その意味で、この分野の学問的蓄積は決して多いとはいえない。

(2) さらに、従来の研究の問題点は、文化学の一環としての食研究と、栄養学、調理学等の自然科学系の研究が、それぞれ独自に展開され、真に豊かな生活形成のための食の追究という総合的視野が希薄であったという点であろう。

(3) 中でも、日本の伝統的食文化研究の分野においては、全時代を包括的にする通史的な研究や、特定の食材に焦点を絞った個別的研究はある程度なされてきたが、一つの時代に焦点を当て、その時代の食文化のあり方を再現し、科学的に検証した研究は少ないといえ、今後の研究の進展に俟つところが多い。

(4) 室町時代物語作品群は、絵画資料としての側面も相俟って室町時代の食文化の様相を知る上で、きわめて有用な素材であると考えられるが、従来食の分野からのアプロー

チはほとんどなされてこなかった。その理由としては、この時期の文献を扱う国文学や歴史学の研究者は、食の分野に関する知識・関心が薄く、一方、自然科学系の研究者は、こうした文献を読む機会に恵まれないことが考えられる。

(5) その意味で、中世の文献資料の解明に従事してきた本研究の研究代表者と、栄養学、調理学の立場から食の科学的解明に従事してきた研究分担者の共同研究は、これらの間隙を埋め、室町時代食文化のあり方を具体的に解明する可能性があると考えられる。

## 2. 研究の目的

(1) 近時、食育の問題が重要視され、あらためて日本の伝統的食文化見直しの必要性が認識されはじめている。

(2) しかしながら、日本の伝統的食文化についての研究は、いまだ十分であるといえず、その文化的側面での実態の検証、さらには栄養、健康面からみた科学的合理性の立証は、今後の研究に俟つところが多い。

(3) 以上の観点から、本研究は、近代にまたがる日本の伝統的食文化の起点と位置づけられる室町期の食文化を多面的に追究することを目的とする。

(4) すなわち、室町時代の生活文化のあり方を反映している室町時代物語に焦点を当て、生活文化史、調理学、栄養学等の角度から、この時代の食文化のあり方を検証する。そして、最終的には、これらの作業を通して、現代人の豊かで健康的な食生活に資することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 室町時代物語は、室町時代を中心に制作された短編小説の呼称であり、その種類は、400種を優に超えている。これらの物語は、この時代に生きた日本人の精神や生活文化のあり方をリアルに映し出すという側面を有しており、この時代の食文化のあり方を知る上で、恰好の資料を提供している。しかしながら、従来これらの物語群の研究は、もっぱら国文学の領域とされ、食の分野からのアプローチは、ほとんどなされていないというのが現状である。

(2) さらに、室町時代物語作品群の特徴の一つは、おびただしい伝本の多くが絵巻、絵本の形態で伝来しているという点である。こうした絵巻資料は、当時の生活文化の様相をリアルに描いており、その解読によって得られるものは大きいといえる。本研究は、室町時代物語を主対象として、

食材・食品の実態の考察とその再現。

調理法と調理の実際の解明とその再現。

食卓風景と食事作法の解明とその再現。

等の研究を目指している。その際、可能な限り、絵巻、絵本の形態を持つ資料を対象とし、視覚的な面から、この期の食文化のあり方を、生活文化の一環として追究する。さらに、研究分担者の協力を得て、それを实际的に再現する。

(3) 以上の観点に立って、本研究では、室町時代物語作品群を対象として、次の諸点の解明を研究の範囲とする。

祝言の食文化の実際とその再現

年中行事の実際とその再現

餅と饅頭をめぐる食文化の実際とその再現

僧院の食文化の実際とその再現

飲酒文化の実際とその再現

肉食文化の変容とその再現

茶の湯と茶の子の実際とその再現

植物性食物の変容の実際とその再現

魚鳥文化の変容の実態とその再現

(4) なお、本研究は室町時代物語を主たる対象とするが、その補助的資料として、室町時代には該当しない各種絵巻物、『四条流包丁書』、『大草家文書』等に代表される料理書、『庭訓往来』、『尺素往来』等の往来物、『本朝食鑑』等の近世の本草書および雑書、『言継卿記』等の公家日記、各種室町期武家文書活文化の一環という位置付けにおいて、できるだけ具体的に解明することを目的としている。

## 4. 研究成果

(2006年度)

(1) 室町時代物語『常盤の姥』、『猿の草子』にみる室町時代食文化の研究

上記の課題について、

『常盤の姥』、『猿の草子』所出の食品一覧とその分析

生活文化史的考察 絵と詞から一

という2点を中心に検討を加えた。

については、当該作品に登場する食品を『尺素往来』、『庭訓往来』掲出の食品と比較し、その種類と食品の掲出順位について分析した。また、個別項目として「米食文化」、「肉食禁断思想」、「点心」、「茶」を取り上げ、室町中期から戦国期にかけての食文化のあり方とその変遷について考究した。

また、については、両作品に描かれた挿絵と詞書に注目し、この時代における老人をめぐる生活文化と祝宴の食文化の具体相を分析した。

また、『常盤の姥』、『猿の草子』の2作品間においても、そこに登場する食品に差異が

みられることを、室町中期から戦国期にかけての食文化の転換の様相を反映するものと把握した。例えば、海産魚介類の食味順位の変動、野菜類における自生植物から栽培野菜への変化である。

(2) 食文化資料としての室町時代物語『鼠の草子』

『鼠の草子』には種々の伝本が知られ、それぞれが、本文となかば独立した形で、詳細な調理場面や祝宴場面を描いた挿絵を持っている。本研究では、

天理図書館蔵本

サントリー美術館蔵本

天理図書館蔵別本

相互の比較対照、分析を通して、食文化研究資料としての本作品の価値について考察した。より、具体的には、

『鼠の草子絵巻』成立の時代と室町の酒宴文化

『鼠の草子絵巻』の調理場面

『鼠の草子絵巻』に見る厨房および食材という項目を設け、挿絵を中心として当時の生活風俗、食文化のあり方を考察した。

そこには、厨房の形態や、配膳係、配膳奉行、箸かき、調理監督、菜の盛り付け係、包丁師、汁の味見役、芥子搦り、飯盛り、蒲鉾作り、酒奉行、魚の下処理役、井戸汲み等の姿が克明に描かれている。また、酒、かまぼこ、たちばな焼き、白鳥等々といったこの時期の食文化を代表する食品・食材が登場している。本研究では、同時代文献資料との比較対照を通して、本作品に描かれるこれらの場面が室町期の上流武士階層の宴席での食のあり方をリアルに反映するものであることを明らかにした。

また、分析の対象とした3つの伝本相互にも、かなりの相違がみられ、それらが概ね、時代の変遷による食の変化とも関わっていることに言及した。

(2007年度)

前年度に続き、室町時代物語『鼠の草子』を研究の対象とした。前年度は、諸種の記録類を補助資料として、『鼠の草子絵巻』に描かれた調理場面の構成から窺われる、当時の食生活の特徴を明らかにすることに努めたが、当年度では、それを一歩進めて、そこに登場する個々の料理と食材について分析、考察した。具体的には、

鼠と室町の都市消費社会

『鼠の草子』における汁物料理

『鼠の草子』にみる庖丁師

食材としての芥子

室町時代の海老料理

という各項目を設定し、同時期および江戸時代の諸文献を参考に考察した。

室町時代物語において、大量に跋扈する鼠の群れは、室町時代における消費経済の発展、豊かな食糧事情の象徴的表現といえることができる。貨幣経済の急速な普及が、鼠を福神である大黒天の使いであるとする当時の民間信仰と相俟って、京都を中心とする都市生活に鼠の横溢という事態を招いた。

この物語に登場する豪華な料理や食品もそうした時代相をリアルに反映するものといえる。たとえば、ここに登場する汁物料理は、ロドリゲスの『日本教会史』に宴会の主要料理と紹介されている本膳料理における汁物料理と明瞭に対応しており、『祇園御見物御成記』、『朝倉亭御成記』に登場するものと共通している。また、この物語の調理場面に描かれる鯛、白鳥、雁等といった食材は、この時代の饗宴料理の最も主要なものであった。さらに、食材庫に大量に描かれる伊勢海老の挿絵は、『式三献七五三膳部記』、『永禄四年三好亭御成記』等に記述される本膳料理に用いられるものであった。

(2008年度)

当年度は「中世における粽伝承と年中行事」を主テーマとし、中世における食の儀礼と年中行事の関係を、粽をめぐる伝承を中心に考察した。

室町時代物語『貴船の本地』には、節分と五節供における食習慣即ち、豆煎り、魚焼、若菜摘み、桃花酒、草餅、粽、素糰、菊花酒とった食の儀礼と鬼退治の伝承が密接不可分に結びついている。これと同様の伝承は、同じく室町期の『祇園牛頭天王縁起』等にもみられ、必ずしも特異な伝承とはいえないものがある。本研究では、中世の粽伝承を中心に、室町時代物語に登場する年中行事と食の儀礼の関係を、当時の疫病の蔓延を鬼神の跋扈と観じ、それから身を守るうとする中世人の生活の知恵という観点から考察した。そこには、多分に宗教的ではあるが、食物の力によって健康を保とうとする中世人の生活の姿勢が見られる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計4件)

小林美和、富安郁子「中世における粽伝承と年中行事 - 室町期食文化の周辺」、帝塚山大学現代生活学部紀要5号、2009年、23～32頁、査読 無、

小林美和、富安郁子「室町時代食文化資料としての『鼠の草子絵巻』その - 料理と食

材を中心として一」、帝塚山大学現代生活学部紀要4号、2008年、11～23頁、査読 無、

小林美和、富安郁子「室町時代食文化資料としての『鼠の草子絵巻』その - 調理場面を中心として一」、帝塚山大学現代生活学部紀要3号、2007年、11～24頁、査読 無、

小林美和、富安郁子「室町時代食文化の研究 御伽草子『常盤の姥』、『猿の草子』にみる一」、帝塚山大学現代生活学部紀要2号、2006年、11～26頁、査読 無、

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林 美和 (KOBAYASHI YOSHIKAZU)  
帝塚山大学・現代生活学部・教授  
研究者番号 70195824

### (2) 研究分担者

富安 郁子 (TOMIYASU IKUKO)  
帝塚山大学・現代生活学部・教授  
研究者番号 10123671